

ウクライナと私
—日本ウクライナ
友好議員連盟の23年—

森 英 介
岡 部 芳 彦

Україна і я:
23 роки Парламентської асоціації дружби
«Японія — Україна»

Ейсукэ Морі
Йошіхіко Окабе

神戸学院経済学論集

第50巻 第3号 抜刷

平成30年12月発行

ウクライナと私 —日本ウクライナ 友好議員連盟の23年—

森 英 介[†]
岡 部 芳 彦[‡]

岡部 このたびは特別講演ということで、日本ウクライナ友好議員連盟会長の森英介先生にお越しいただきました。森先生は政治の世界で、ウクライナとの交流をずっと続けて来られました。私も一度、体系的にお話をお伺いをし、その交流をまとめてみたいと長年、思っていました。この日本とウクライナの政治交流というのはあまり知られていないトピックですので、今日のご講演から、いろんな知見を得ていただければと思います。

まず、森先生の経歴を簡単にご紹介させていただきたいと思います。昭和23年生まれで、東北大学をご卒業されまして、川崎重工業に入社をされております。その後、原子力プラント溶接研究センターによりまして、工学博士号を名古屋大学から授与されました。平成6年には労働政務次官、厚生労働副大臣などを歴任された後に、平成20年には法務大臣を1年間、お務めになっておられます。現在の主な国会での役職は、衆議院憲法審査会会長と大変な職責をお務めになっておられます。

今日のご講演は日本とウクライナとの交流について、私から質問させていた

[†] 衆議院議員・日本ウクライナ友好議員連盟会長

[‡] 神戸学院大学経済学部教授・ウクライナ研究会会長

ウクライナと私—日本ウクライナ友好議員連盟の23年—

だきながら進めさせていただきたいと思います。

それでは、まず私と森先生の出会いを、少しお話をさせていただきたいと思います。2015年の3月に、パブロ・クリムキン外相がウクライナから来日した時に、ウクライナ大使館の方から「岡部さん、クリムキン外相と会えますよ」と言われて、(ウクライナの民族衣装の) ヴィシヴァンカを着て、言われたとおりホテルニューオータニの16階に行きました。その時、少し手違いがあり、間違った部屋に入ってしまいました。そこは日本ウクライナ友好議員連盟主催のクリムキン外相との朝食会の会場でした。この時点で、森先生と私は面識がありません。見ず知らずの男がウクライナの民族衣装を着て突然入ってきたので、森先生が、驚いた顔をされたのを私は記憶をしております。あれは誰だと思われたんだと思います。ただ、その場には友好議員連盟の有力な会員で、現在は内閣官房副長官の西村康稔先生もおられました。西村先生もぎょっとしてたんですけども、西村先生の選挙区は私の大学がある場所で、2012年に「第3回日本ウクライナ地域経済・文化フォーラム」を神戸学院大学で開催した時にパネリストを務めていただきました。西村先生がフォローをしてくれて、「今日は、ウクライナに縁のある、岡部先生もお越しですが」と言っていたので、その場は何となく、丸く収まりました。実は、私はクリムキンさんと同じ階の別の場所で会う予定だったことを後で知りました。

それから3カ月ぐらいして、永田町で用事がありまして、衆議院第1議員会館の周囲を、歩いていたときのことです。前から偶然、森先生が歩いて来られました。ビックリして、あ、この人だと思って、ごあいさつをしたのが、初めてお話をした経緯になります。それ以来、いろいろウクライナ関係の行事があるたびにお手伝いさせていただいたり、ご指導いただくことも多々ありますが、今日はその関係もありまして、ぜひ、ウクライナ研究会でお話をさせていただきたいと思ひまして、お越しいただいた次第です。

それで、最初の質問なんですが、日本ウクライナ友好議員連盟、どういう団体で、どういう形でできたのか、ということからお話をいただければと思い

ます。よろしく願いいたします。

森 ただいま、岡部先生から大変、詳しいご紹介いただきまして、ありがとうございます。今日はこの研究会にお招きをいただきまして、ウクライナとの関わりについてこれまでのいきさつをしゃべるということで参上した次第です。といっても、私の場合、ただ長くウクライナとお付き合いしてるというだけで、皆さまのように、系統的にウクライナについて研究したり、分析したりしてる者ではありませんので、非常に雑ばくな話になると思いますが、お許しをいただきたいと思います。

「日本・ウクライナ友好議員連盟」は、1995年3月10日に設立されました。かれこれ23年前のことなのですが、なぜ、この議連が設立されたかということ、きっかけとなったのは、1995年3月末のウクライナの2代目のクチマ大統領の来日という出来事です。

国会議員の中でウクライナとの交流に一番熱心に尽力されたのは、柳澤伯夫元衆議院議員です。柳澤先生は、後に金融担当大臣や厚生労働大臣を歴任されましたが、当時は外務政務次官をお務めになっていました。それまでウクライナとの議員連盟がなかったものですから、せっかくクチマ大統領がみえるのだから、議連を作ってお迎えしようじゃないかと柳澤先生は発案されました。そして、ご自分が政府側にいるので動きにくいので、おそらく使いやすかったのでしょう、派閥（宏池会）の後輩の私が議連の事務局に任命されました。これが私とウクライナのご縁の始まりでもあります。初代の会長には今の文部科学大臣の林芳正さんのお父さんで、宏池会、宮沢派の大先輩である林義郎先生にご就任いただいて、発足することになったわけです。

3月10日に議連が発足して、3月後半にこの議連で大統領の歓迎レセプションをしたというふうに記憶をしています。言ってみれば、コナン・ドイルの小説『シャーロック・ホームズ』の「赤毛連盟」みたいな、にわか作りの議員連盟でございました。

それが、それからずっと連綿と続いてきて、お配りしたリストに書いておりますように、来日したウクライナの主な要人には、ほとんどお会いをしていると思います。このリストは私のメモに基づいて岡部先生が作成されました。ただ、岡部先生が気を利かして付け加えてくれたんだと思いますが、2011年の1月に、ヤヌコーヴィチ大統領にお会いしたことになります。しかし、実はこの議連主催の歓迎会は京都であって、私はちょっと京都に行けなかったものですから、このときは欠席し、残念ながらヤヌコーヴィチ大統領には、今日までお会いしたことはありません。今はロシアに逃亡されてしまった方ですから、この方だけに会ってないっていうの、なんか因縁めいた感じがします。それで、ずっと林会長の元に、柳澤幹事長、森事務局長といった体制で、やってきたんですけれども、林先生が引退されましたので、2003年から柳澤伯夫先生ご自身が会長になりました。その柳澤先生も2011年に引退されたものですから、その後、柳澤先生のご意向で、私が3代目の会長になったというのが、私が今、会長であるゆえんでございます。

私が後任に指名された理由は、この議連の創立時からのメンバーであることももちろん一つだと思います。それと、さっき略歴でご紹介いただいたように、私、議員になる前は原子力分野の技術者、研究者でありまして、ウクライナとの関係においては、やっぱり、この原子力の問題を抜きにできないということも柳澤先生は、私を指名する理由の一つに挙げられました。そんなわけで、2011年から私が会長を務めておりまして、今日に至ってるというのが、この議連のこれまでの経過でございます。

岡部 どうもありがとうございました。今、包括的に流れもお話をさせていただきました。来日した4人の大統領の中で、ヤヌコーヴィチ大統領だけお会いになられてないということでしたが、逆に言えば、ヤヌコーヴィチ大統領以外の3人の大統領には、全て会っておられます。ウクライナの独立以後の歴史を代表するような大統領の方々と思うんですが、それぞれ、どのような印象を

持たれたか、もしよろしければ、お聞かせください。

森 クチマ大統領は、だいぶ前のことで、ちょっと記憶が薄らいでいますが、とても温厚で、素朴な感じの方のように、何となく記憶をしています。このクチマ大統領とお会いしたときに、柳澤伯夫先生が、大統領ご本人だったか大使だったか定かではありませんが、半分軽口のように、「やはりこれから、貴国としてはロシアとEUの間に立って、女の手管のように、両国と上手に付き合っていられることが肝要ですね」みたいなことを言われたんですよ。女の手管ってのは、ウクライナの方や、また、お若い方は、分からないかもしれませんが、要するに、昔の言葉で、女性が男性を二股かけるときに、それぞれを巧みに扱って付き合うワザみたいなことです。

クチマ大統領は、その前年の7月に大統領に就任されたばかりでした。当時は多分、ロシアとEUとの間の、ちょうど中立的な立場におられたんだと思いますが、その後再選されてからは、次第にロシア寄りになった印象を持っています。クチマ大統領のそのような足どりを見ると、柳澤先生が言った軽口のようなことも、存外核心をついていたのではないかという気がします。

それから、次のユーシチェンコ大統領ですが、大統領選挙のときに、毒を盛られたという噂も流れましたが、せっかくの美男子なのに顔がぶちぶちになってしまったと聞いておりました。その直後のことであつたんですけども、でも、お会いしたときには、あんまりそういうことは気にならず、やはり、なかなかカッコいいおっさんだな、というふうに思いました。

また、このユーシチェンコ大統領って、趣味が養蜂だというんですね。日本で趣味が養蜂っていう人、聞いたことがないものだから、大変びっくりしました。ウクライナでは、結構、ハイソな人たちの趣味として、養蜂っていうのは、割とよくあるようで、ああ、そういうものかと思いました。

あまり知られていませんが、ユーシチェンコ大統領は空港に着いて、その足で真っすぐ玉川学園に行かれたんです。実は、玉川学園は、私の父の母校で、

ウクライナと私—日本ウクライナ友好議員連盟の23年—

そんな関係から、私は現在評議員をしています。私にとっては大変身近な玉川ですが、大統領が空港からまっすぐ玉川に行かれたと聞いたときはなんでだろうとちょっと不思議に思いました。でも、大統領の趣味が養蜂と聞いて、ハハんと納得した次第です。というのは、玉川大学は、日本だけでなく、世界の中でもミツバチの研究でナンバーワンの学校なんですよ。

それから、首相として来日されたユリヤ・ティモシェンコさん。朝7時半からのホテルでの朝食会だったんですけど、あの特徴あるくるくる巻いた髪型がばっちり決まっていて、本当にもう、アクトレスのように、素敵な美人でしたね。それにしても、よくあんな早朝にあれだけのメイキャップができるものだなと感心しました。

2016年、ポロシェンコ大統領は、私が会長になってからお迎えをしました。私は、ポロシェンコ大統領の今の取り組み、高く評価していきまして、人間的にも、やっぱり想像してたとおりの信頼できる人物だな、というふうに思いました。非常に誠実に、真剣に汚職対策や、あるいは改革に取り組んでおられるということが、ひしひしと伝わってきました。ポロシェンコ大統領の今までの経歴を見ますと、チョコレートという実業でもって、あれだけの財を成した人ですから、事業家としてもそれなりの裏付けがあるんだろうというふうに感じました。ただ、来日されたとき、ちょうどパナマ文書が公表されたときで、そればかり記者に聞かれて、ちょっと気の毒かったです。

岡部 ありがとうございます。森先生がまさかの蜂蜜つながりでのご縁がユーシチェンコ大統領とあったとは、ちょっと意外です。ご存じの方もおられるかと思いますが、ウクライナ農産品の重要な輸出品として、蜂蜜が挙げられています。ちなみに、わが家の食卓にある蜂蜜も、今、ウクライナ製でありまして、日本でも買えるようになってきております。

少し話題を変えますが、ウクライナ友好議員連盟についてぜひ紹介させていただきたいことがあります。会長の森先生は工学博士をお持ちで、副会長の遠

山清彦衆議院議員ですが、イギリスで平和学博士を取っておりまして、事務局長の盛山衆議院議員は、法学と商学の博士号を持っておられ、日本で一番、高学歴な議員連盟じゃないかと思います。そんな中、川崎重工にかつてお勤めされ、エンジニアとしてのご経験があり、工学博士号をお持ちの森先生は、いままでに2回、チェルノブイリ原子力発電所をご訪問されたと聞いております。日本とウクライナは福島、チェルノブイリと、共通の経験を持っていますが、ご訪問の感想をお聞かせいただければと思います。

森 私は2013年と、2015年の2回、ウクライナを訪問していますが、2回ともチェルノブイリに足を運びました。福島原発の事故に遭遇して、かつて原子力分野の技術者だった私としては、いろいろと考えるところがありました。しかし、その上で、やはり原子力エネルギーを利用しないと、人類は存続できないと考えている者です。福島は何回も訪れていますけれども、チェルノブイリをこの目で見て、福島とは違った意味で、なかなか大変だなんていうふうに感じました。

福島の場合は、風が陸から海に向かって吹いていたので、放射性物質があらかた太平洋に行っちゃったんですね。だから、放射性物質が陸地に落ちた量っていうのは、事故の度合いにしては案外少なかったというのが、不幸中の幸いでした。ウクライナは、それがほとんど陸地に落ちてしまったので、周辺もまだまだ放射能レベルが高く、復旧にもかなり手こずっているという印象を持ちました。また、原子炉本体を覆う巨大なシェルターを作っていましたが、その態様寿命は100年ぐらいということですから。そのあとの管理はどうするのか、やっぱり、相当長期的な課題になるんだろうというふうに思います。そういう意味でも、日本とウクライナは、協力し合うように宿命付けられていると、私は思っています。

最初の訪問でお会いした要人の中で特に印象に残っているのは、国家原子力規制院のミコライチュク長官という女性です。長官は、福島のような原子力発

電所の事故は、いずれ起るだろうと思っていた、しかし、その事故がまさか日本で起るとは思いもよらなかったとしみじみと語っておられました。確かに、私ども原子力に携わってきた者は、日本の原子力発電所ってのは一番、高品質で安全性も高いというふうに自負していましたから、日本の原子力発電所では重大な事故など起るはずがないと思い込んでいたところがあります。こういった落とし穴があったってことをきちんと認め、そしてこれから、そういったリスクを極小化するように努力しなきゃいけないってことを、改めて感じたわけです。

余談になりますけれども、チェルノブイリの事故が起こったときは、ウクライナはソ連邦だったわけです。スリーマイルアイランド、チェルノブイリ、福島っていう重大事故が、奇しくもアメリカ、ソ連、日本という原子力先進国で発生したということも、何となく考えさせられる事実です。こういったことを一つの反省材料にして、改めるべきは徹底的に改め、安全性に最重点において原子力の将来を切り開いていかなきゃいけないと考えてるところで、そういう意味でも、私、ウクライナとの交流を大事にしたいと思っています。

岡部 ありがとうございます。また話題を変えまして、主な面会記録に登場する要人だけでなく、たくさんのウクライナの方々にお会いされていると思うのですが、その中で、印象に残る出会いについて、お話をいただけますでしょうか。

森 私は、前のミコラ・クリニチ大使を大変、尊敬し、信頼をしています。最初にお会いしたときから敬愛の念を抱いていましたが、その思いが決定的になったのは、2011年3月11日の東日本大震災が発災したときのことです。クリニチ大使はたまたま震災の直前に帰国されていて、震災のまさにその日に日本に帰って来られました。それ以来大使は、自分の持ち場を離れず、余震が続き、放射能の不安が高まる東京にずーっと留まられたんですよ。各国の大使の多くは

関西とか九州とか、更には、本国に移動されたと聞いてますから、そうしたクリニチ大使の姿勢を見て、ああ、やっぱりこの人は本当に日本の友達なんだなと、改めて強く感じた次第です。

岡部 クリニチ大使ですが、その後、キエフのウクライナ外交アカデミー院長になられ、現在は、駐オーストラリア・ウクライナ大使としてご活躍中です。

それでは次の質問です。議連会長ということで、議員外交が主な活動となってくると思います。国の外交は一元外交が基本だとは思いますが、議員同士の付き合いというのが、日本の外交政策に、どのような影響があると思っておられますでしょうか。

森 例えば、最高会議議員のコンスタンチン・ジェヴァホさんなんかは、日本にオフィス持っておられて、しょっちゅう来るんですね。彼は、事業家でもありますけれども、議員同士ということで非常に親しくお付き合いしています。政府間と違って、表向きじゃない、いろんなお話を聞くことができます。議員同士が親しく付き合うっていうのは、いろんな多面的な要素をカバーすることができるから、極めて意味があると思います。本当はもうちょっと、僕なんかも、しばしばウクライナに足を運んで、いろんなお付き合いができやいいと思うんだけど、日本では国会開会中は議員が日本を出られないようなことになっていて、例えば、今回も7月20日まで会期があると、閉会後の8月に訪ねても、そちらに人がいなくなっちゃうでしょ。そういうことで、なかなかいいタイミングを見つけられなくて、頻度を高めることができないんです。ただ、やはり政府とは違った次元で、胸襟を開いて、お付き合いを深めていくというのは、極めて大事なことだと思います。

岡部 ありがとうございます。さて、1995年以来、来日される歴代のほとんどの大統領、あるいは、さまざまな大臣、最高会議議員にお会いしてこられま

ウクライナと私—日本ウクライナ友好議員連盟の23年—

したが、その中で、時期によって変化というか、例えばクチマ大統領の時代はこういう政治家が多くて、今はちょっと変わったね、みたいなことっていうのをお感じになることはありますか。

森 そもそも、ソ連邦が解体したときに、独立した各国の中でウクライナが最も早く成長する、発展するっていうふうに見られていたんですよ。国土も広い上に広大な肥沃な農地にも恵まれている。また、高い工業力や技術力もある。ところが、現在に至るまでもなかなか思うようにいってないというのが実状です。その大きな原因は、政治的不安定にあると思っています。もう一つは、国内にエネルギー資源を持たないということもウイークポイントとして挙げられます。そのためにどうしてもロシアにグリップされてしまい、独自の道をすすむことができなかったのではないかと。でも、2014年のロシアの軍事介入以来、ウクライナは、国を挙げて、アンチ・ロシア、EU志向でまとまっているように見受けます。それにしても、何より政治の安定が大事だと思うんですが、どうも、振り子のように揺れているように見えますね。

今も、非常に心配していることがあります。現在のウクライナの最優先で最重要な課題は、ポロシェンコ大統領が推進している汚職対策とか、改革とかだと思うのですが、それを推し進めようとする、国民にとっては痛みを伴うわけで、またぞろ振り子が、逆に振れてくんじゃないかなっていうことです。やっぱり、もうちょっと、政治の安定っていうのがウクライナで実現すると、もっと将来が切り開けるんじゃないかなと、実に歯がゆい思いです。

一般参加者 ちょっとよろしいですか。なんで政治が安定しないんですか。
(以下略)

森 工業力、技術力もありますし、農地もありますしね。あらゆる状況がそろってんのね。

岡部 政治の安定については、私も同じ疑問は確かに持っています。4月にウクライナに出張したときに、同じような質問を、とあるウクライナのある省の関係者にお尋ねしました。その答えは、なかなか興味深く、「確かに安定はしてないけれども、それはやっぱり、われわれに民主主義があるからじゃないか」とのことでした。それは、なかなか言い得て妙だなと思いました。政治的に安定してないというのは、確かに事実なのかもしれませんが、それはいろんな人が、いろんな意見を持って、ダイバーシティーがある表れじゃないかと。少なくとも、それが無いロシアよりはましである、というふうに、その方は言っておられました。確かに、ビジネスする環境としては、不安定なのはちょっとやりにくいとは思いますが、それも一つの答えかなというようにはちょっと私は感じた次第です。

森 やっぱり、国内にエネルギー源がないから、どうしてもロシアに首根っこを抑えられているってことはありますよね。逆に言うと、要するに、ロシアの影響力が他の東欧諸国に比べて強くて、それによって、いろんなことが左右されちゃうんじゃないかっていう気がするんですね。もちろん、ウクライナ自身の問題もあるかもしれないけど、やっぱりそういう外的要因もあると思うんですね。で、そのエネルギーも、最近ようやく、西欧からの逆送が、だいぶ増えてきたようですよ。そういう意味で、ロシアからの自立ってというのは、徐々に進んでるんでしょう。だけど、クリミアは占領され、やっぱりロシアの影響力を、実に直接的に感じる国ですよ。それによって、どうしても政治が揺れちゃうんじゃないかしら。両方に引っ張られて。今は、ロシアに対抗するため割とまとまっているようには見えますけれどもね。

岡部 それでは質疑に移っていきたいと思いますので、どなたかございましたら、お尋ねいただけますでしょうか。最初に、ご所属とお名前を、よろしくお願ひいたします。いかがでしょうか。

ウクライナと私—日本ウクライナ友好議員連盟の23年—

パブリ 富山国際大学准教授のパブリと申します。私、10年前に浜松に住んでいて、ヤマハで働いている人と話をした時に聞いたのですが、結局ヤマハの中で、ウクライナはロシアの周辺っていうか、ロシアに属するような国となっただけですね。ウクライナ人としては、ウクライナはだいぶヨーロッパに近いんじゃないんですかっていうふうに話をしたのですが、でも海外で営業するときには、どこかのルートからでも入らなければいけないので、ロシアにくっつく形のほうが、やりやすいというふうな答えをもらいました。多分、ヤマハだけではなく、ほとんどの日本の会社とか、業界はそのような意見っていうか、やり方だと思いますけれども、今は、どうなったのかと疑問に思っています。もう、ロシアとウクライナは、同じグループにいれないのではないのでしょうか。それともまだ、同じように考えているのかな、昔と同じで。森先生は、どう思いますか。

岡部 それは日本の会社がということですか。それとも、森先生がということでしょうか。

パブリ もちろん、森先生になんですけれども、日本の社会って、政治家にしても、ビジネスマンにしても、例えば、ウクライナに直接に製品を販売するとか、直接に何かプロジェクトとかをやり遂げるっていうのは、まだ難しいのでしょうか。2014年以後は、もうロシアに気を遣わなくていいんじゃないか、そういう意味の質問です。

森 例えば今、中欧では、かなりドイツが突出してますよね。その周りでは、どうしてもそのドイツ周辺の国っていうふうな位置づけになるのは、何となく分かりそうな気がするんだけど、一方、ウクライナでは、今、ロシアとは違う道を歩むっていうふうに、おおむね、コンセンサスができてるわけでしょう。だったら、やっぱりそういうことで、世界で認めさせていくしかないんじゃない

いですかね。ウクライナはポテンシャルティーがすごくあると思うんですよね、工業力、科学技術力だってあるわけだし、例えばサイバーセキュリティなんかは、世界でもかなり優れたほうでしょう。いろんなシーズがあるし、ましてや、世界一、肥沃な農地に恵まれているんですから、政治が安定さえすれば、そういった持てる能力を引っ張り出して、それこそポーランドやドイツに、追いつけ追い越せてこともありうると思うんですよね。だけど、そこでもって、内部摩擦で消耗しちゃって、なかなか前へ進めないように見えますね。

岡部 どうもありがとうございます。じゃあ、他、ご質問、いかがでしょうか。どなたか、ございますか。じゃあ、どうぞ。

藤森 ウクライナ研究会副会長の藤森です。今の質問と、ちょっと関連してるんですが、森先生はたぶんロシアの議員や政治家ともお会いしてるかと思うんですが、例えば、ウクライナの議員・政治家と、ロシアの議員とか政治家で、一緒に食事をされたりして、何か、ああ、これがウクライナか、と感じられたことってのは、あるいは、ロシア人が食べないものをウクライナ人が食べたとか、何か違いみたいなものを、もし感じられたことがあれば教えていただきたいんですが。

森 僕は本当に、あんまりインターナショナルでなくて、ウクライナ以外の政治家で個人的に親しい人はいないんですよ。

岡部 ウクライナの政治家の共通した特徴を感じられたことはありますか。

森 結構、それぞれに個性的です。例えば、今、ウクライナ日本友好議員連盟会長のレオニード・イエメツさんなんかとは何回かお会いしたけど、非常にしっかりした見識を持って、これから期待できるんじゃないかと思います。それか

ウクライナと私—日本ウクライナ友好議員連盟の23年—

ら、議論して面白かったのは、ヤツェニユクさんだ。ちょうどロシアの軍事介入の直後にウクライナを訪問して、彼が首相のときにお会いしましたけれども、実に率直な人物で、僕は好感を持ちました。我々がウクライナを訪問したちょうどその頃、国連総会があったんですね。その折にプーチンの演説に対して各国の代表がこぞって拍手したのは、けしからんって言ってマジで怒っていました。話は違いますが、今、ウクライナの国会議員が皆すごく若くなっちゃったんですよ。やはりもうちょっと老壮青っていうか、何も一斉に若返らなくてもいいのになあ、というふうに思います。

岡部 ありがとうございます。他、いかがですか。もう、最後の質問ぐらいになるかと思います。じゃあどうぞ。

ヴィオレッタ・ウドヴィク（在ウクライナ大使館2等書記官） 森先生、面白いお話、どうもありがとうございました。一つ質問がありますけれども、今日はウクライナに関わる日本の政治家に関連するお話があったと思うんですけれども、実は最近、日本の一般の人たちが、ウクライナのことは、あまり知らないことに気が付きました。昔は、よくロシアに関連付けられてつらい時代もあったんですけれども、今でも全然違う国ですよっていうことを何回も説明する必要があって、いろんな交流会とか説明会とか、大使館の職員として、オーガナイズ、企画しております。一般の日本人の中からウクライナのファンを掘り出していくためには何をすればいいのか、ぜひ教えていただければと思います。よろしくお願いします。

森 ウクライナのファンの日本人をどうやってつくるか。基本的に僕はウクライナを知らないだけで、知れば好感を持つと思うんですよ、日本人はね。あんまり、よその国のこと言っちゃいけないけど、ロシアって、あんまり好感持ってないんですよ。それに対して、ウクライナには、日本人はあまりマイナス

イメージは持っていないと思います。僕はウクライナの方に会うたびに言うんですけど、日本とウクライナとは、三つ、共通点があります。一つは、甚大な原子力災害を経験したこと。二つ目は、国内にエネルギー源を持たない。みっつ目は、ロシアという厄介な大国を隣に持つってことなんです。ロシアがなきゃ、ウクライナと日本って、すぐ隣になるわけですよ。最近ではちょっと大鵬のブランドは少し薄れてきたかもしれないけど、どういうふうにしたら、もうちょっと、日本人のウクライナに対する関心呼び起こせるか、一緒に考えましょう。

岡部 どうもありがとうございました。ヴィオレッタさんから森先生への宿題という形ですね（笑）。どうもありがとうございました。そろそろ、時間が来てしまいました。まだまだ、お話は尽きないかと思いますが、特別講演ということで、本日は「ウクライナと私—日本ウクライナ友好議員連盟の23年—」ということで、お話をいただきました。2年後の2020年、日本で東京オリンピックがある年になりますと、ウクライナ友好議員連盟の25周年。そして、さっき調べましたら、森先生も、そのとき議員在職30周年をお迎えになるということですので、ますますのご活躍を心よりお祈り申し上げます。本日はご講演、どうもありがとうございました。

（了）

※2018年6月23日 ウクライナ研究会（国際ウクライナ学会日本支部）第39回研究懇談会（於：早稲田奉仕園）における講演を編集。

日本ウクライナ友好議員連盟 概史

歴代会長

- 1995年3月 日本・ウクライナ友好議員連盟設立 林義郎初代会長就任
2003年11月 柳澤伯夫二代会長就任
2011年8月 森英介三代会長就任

主な要人との面会録（森英介代議士関連）

- 1995年3月 レオニード・クチマ大統領
1997年5月 ヘンナジー・ウドヴェンコ外相
1997年10月 シュペック国家復興開発庁長官
1998年3月 ウドヴェンコ外相（国連総会議長として来日）
2000年6月 タラシユク外相（小渕前総理の葬儀参列）
2001年10月 クチマ大統領夫人，セミノジェンコ副首相
2001年11月 ハヴリツシュ最高会議副議長一行
2003年5月 リトヴィン最高会議議長
2004年2月 イェルチェンコ外務第一次官
2004年6月 グリシチェンコ外相
2005年3月 トメンコ副首相（愛知万博開会式出席）
2005年7月 ユーシチェンコ大統領（タラシユク外相，テリョーヒン経済相，
チェルボネンコ運輸相ら同行）
2008年3月 ヴォロディーミル・オフリスコ外相
2009年3月 ユリヤ・ティモシェンコ・ウクライナ首相，ネミーリャ副首相，
ダニリシン経済相，プロダン燃料エネルギー相，ノヴィツキー
産業政策相，クイビダ地域発展・建設相，クチェレンコ住宅・
公共サービス相，ポルタヴェツ石炭産業相
2011年1月 ヴィクトル・ヤヌコーヴィチ・ウクライナ大統領，グリシチェ

- ンコ外相，クリニャク文化相同行（森代議士は面会せず）
- 2012年3月 ヴォロディミル・リトヴィン・ウクライナ最高会議議長
- 2012年10月 アルブゾフ・ウクライナ国立銀行総裁
- 2013年8月 ウクライナ訪問。チェルノブイリ視察，国家原子力規制院 ミ
コライチュク長官・オレクサンドル。ヴィルクル副首相ら多数
の要人と会談
- 2013年10月 ミコラ・プロスクラ立入禁止区域管理庁副長官 会食
- 2013年11月 ミコラ・ステインベルグ・チェルノブイリ原子力発電所元技師
長来訪
- 2014年4月 日本ウクライナ友好議連主催コンスタンチン・ジェヴァホ共同
議長（対日友好議連会長）歓迎総会
- 2015年3月 パブロ・クリムキン外務大臣
- 2015年9月～10月 ウクライナ訪問 アルセニー・ヤツェニユク首相，ヴォ
ロディーミル・フロイスマン最高会議議長
- 2016年2月 ハンナ・ホプコー・ウクライナ最高会議外務委員長
- 2016年4月 ペトロ・ポロシェンコ大統領，ズーブコ副首相，クリムキン外
務大臣，デムチャーシン・エネルギー・石炭産業大臣，ユーリ・
ルツェンコ最高会議議員（のちに検事総長），タラス・クトヴィ
最高会議議員（のちに農相），ナタリア・ミコリスカ経済発展
貿易次官ほか
- 2016年9月 ヴィタリ・クリチコ・キエフ市長
- 2016年9月 ドミトロー・シムキウ・ウクライナ大統領府副長官
- 2017年3月 アンドリー・パルビー・ウクライナ最高会議議長
レオニード・イエメツ最高会議議員同行
- 2017年6月 イエメツ・ウクライナ日本友好議連会長

Україна і я: 23 роки Парламентської асоціації дружби «Японія — Україна»

Ейсукє Морі†
Йошіхіко Окабе‡

Йошіхіко Окабе: Сьогодні до нас завітав Ейсукє Морі, голова Парламентської асоціації дружби «Японія—Україна», який проведе спеціальну лекцію. Пан Морі вже довгий час підтримує відносини з Україною в політичних колах. Я також багато років прагнув докладно обговорити й систематизувати результати цих відносин. Тема діалогу між японськими й українськими політиками мало відома, тому, я гадаю, ми дізнаємося багато нового на сьогоднішній лекції.

Насамперед, я хотів би коротко познайомити вас із життєвим шляхом пана Морі. Пан Морі народився 1948 року, закінчив Тохокуський університет, після чого почав працювати в промисловому концерні «Кавасакі». Пізніше перейшов у Науково-дослідницький центр зварювання атомних електростанцій, здобув науковий ступінь доктора інженерних наук у Нагойському університеті. У 1994 році був призначений заступником міністра праці, також працював заступником

† член Палати представників Японії, голова Парламентської асоціації дружби «Японія—Україна»

‡ професор факультету економіки Університету «Кобе гакуїн», голова Асоціації українців Японії

Україна і я: 23 роки Парламентської асоціації дружби «Японія—Україна»

міністра охорони здоров'я, праці та соціального забезпечення. Із 2008 року 1 рік обіймав посаду міністра юстиції. Зараз виконує надзвичайно відповідальну роботу в японському парламенті на посаді голови Комітету дослідження Конституції в Палаті представників Японії.

Дозвольте, будь ласка, провести сьогоднішню лекцію у формі запитань і відповідей про відносини між Японією й Україною.

Спочатку я хотів би коротко розповісти про нашу першу зустріч із паном Морі. У березні 2015 року, коли міністр закордонних справ України Павло Клімкін приїхав до Японії, співробітник Посольства України в Японії сказав мені: «Пане Окабе, є можливість зустрітися з міністром закордонних справ Клімкіним». Я одягнув вишиванку й пішов на 16-й поверх готелю «Нью Отані», куди мені сказали підійти. У готелі я помилково зайшов в іншу кімнату. У тій кімнаті проходив діловий сніданок міністра закордонних справ Клімкіна й Парламентської асоціації дружби «Японія—Україна». На той час пан Морі та я ще не були знайомі. Я пам'ятаю здивований вираз обличчя пана Морі, коли несподівано увійшов незнайомий чоловік в українському національному одязі. Я гадаю, що пан Морі замислився, хто ж це може бути. Але на зустрічі був також присутній впливовий член Парламентської асоціації дружби Ясутоші Нішімура, який наразі обіймає посаду заступника головного секретаря Секретаріату Кабінету міністрів. Пан Нішімура теж здивувався. Виборчий округ пана Нішімури розташовується в районі мого університету, у 2012 році пан Нішімура брав участь у панельній дискусії на 3-му Японсько-українському форумі з регіональної економіки й культури, який проводив Університет «Кобе гакуїн». Пан Нішімура промовив, владнавши цю ситуацію: «Сьогодні також буде присутній професор Окабе, який має тісні зв'язки з Україною». Насправді, як я пізніше дізнався, моя зустріч із паном Клімкіним була запланована на цьому ж поверсі, але в іншому місці.

Через 3 місяці після цього в мене були справи у кварталі Нагата, я проходив повз 1-й корпус Палати представників Японії. Зовсім випадково назустріч мені йшов пан Морі. Я здивувався, згадав його і привітався— саме так ми вперше поговорили з паном Морі. Відтоді під час різноманітних подій, пов'язаних з Україною, я часто допомагаю пану Морі або працюю під його керівництвом, як і сьогодні. Я хотів, щоби пан Морі обов'язково виступив на засіданні Асоціації українців, тому шановний гість завітав до нас.

Отже, перше запитання— чи могли б ви спочатку розповісти про Парламентську асоціацію дружби «Японія—Україна»: що це за об'єднання, як воно виникло? Дуже прошу до слова.

Ейсуке Морі: Професоре Окабе, щиро дякую за докладну розповідь про мене. Я неймовірно вдячний за запрошення на засідання Асоціації українців, сьогодні я хотів би розповісти про історію відносин з Україною. Хоча я й підтримую зв'язок з Україною вже довгий час, проте систематично не вивчав і не аналізував Україну, як присутні тут шановні колеги. Гадаю, моя розповідь не буде дуже систематизованою, за що хочу попросити вашого вибачення.

Парламентська асоціація дружби «Японія—Україна» була заснована 10 березня 1995 року. Відтоді пройшло 23 роки, приводом для створення асоціації став візит другого Президента України Леоніда Кучми до Японії наприкінці березня 1995 року.

Серед членів парламенту з найбільшим ентузіазмом сприяв підтриманню відносин з Україною Хакуо Янагісава, колишній член Палати представників Японії. Пан Янагісава, який пізніше працював міністром фінансів, міністром охорони здоров'я, праці та соціального забезпечення, тоді обіймав посаду заступника міністра закордонних справ. До того часу ще не було парламентських асоціацій з Україною, тому пан Янагісава запропонував створити таку асоціацію

Україна і я: 23 роки Парламентської асоціації дружби «Японія—Україна»

саме з нагоди візиту Президента Кучми. Пану Янагісаві як члену уряду було важко брати активну участь у роботі асоціації, ймовірно, тому в секретаріат асоціації було призначено мене, молодшого члена фракції («Кочікай»). Так почалися мої відносини з Україною. Першим головою асоціації став батько чинного міністра освіти, культури, спорту, науки й технологій Йошімаси Хаяші—Йошіро Хаяші, старший член фракції «Кочікай», фракції Міядзави. Так асоціація була заснована.

Я пам'ятаю, що 10 березня асоціація була заснована, а в другій половині березня асоціація організувала урочистий прийом Президента. Іншими словами, Парламентська асоціація була дуже швидко створена, наче «Спілка рудих» у романі Артура Конан-Дойля «Пригоди Шерлока Холмса».

Відтоді асоціація діє на постійній основі. Як зазначено в списку, який ми вам роздали, я гадаю, ми зустрілися майже з усіма українськими високопосадовцями, що відвідували Японію. Професор Окабе створив цей список на основі моїх записів. Він також додав, що в січні 2011 року я мав зустрітися з Президентом Януковичем. Однак, насправді, урочистий прийом відбувся в місті Кіото, у мене ж не було можливості поїхати туди, тому я був змушений пропустити захід. На жаль, я жодного разу не бачився з Президентом Януковичем. Зараз Віктор Янукович переховується в Росії. Мені здається загадковим збігом обставин, що я не зустрівся саме з ним. Отже, асоціація довгий час діяла під керівництвом голови—пана Хаяші, з головним секретарем—паном Янагісавою, головою секретаріату—мною, Морі. Коли пан Хаяші пішов із посади у 2003 році, пан Янагісава сам став головою асоціації. Пан Янагісава також склав свої повноваження у 2011 році й запропонував призначити мене третім головою. Саме тому зараз я очолюю асоціацію.

Я гадаю, однією з причин мого призначення головою, звісно, послужило моє членство в асоціації з моменту її заснування. Крім того, як уже згадували в

розповіді про мою біографію трохи раніше, перш ніж стати членом парламенту, я працював інженером, дослідником у галузі ядерної енергетики. Пан Янагісава назвав однією з причин мого призначення – важливість питання ядерної енергетики у відносинах з Україною. Ось чому я головую з 2011 року, і така історія асоціації до нашого часу.

Й.О.: Дуже дякую. Щойно ми почули розповідь про історію асоціації. Ви сказали, що не зустрічалися тільки з одним Президентом України – Віктором Януковичем. Іншими словами, ви бачилися з усіма іншими трьома Президентами, які приїжджали до Японії. Я гадаю, Президенти є ключовими персонами в історії незалежної України. Якщо ваша ласка, розкажіть про ваші враження від зустрічі з кожним Президентом.

Е.М.: Я бачився з Президентом Кучмою доволі давно і вже не дуже добре пам'ятаю зустріч, але він склав враження дуже доброї, простої людини. Під час зустрічі з Президентом Кучмою пан Янагісава сказав, шуткуючи, чи то Президенту, чи послу щось на кшталт: «Відтепер ваша країна розташовується між Росією і Європейським Союзом і, наче хитра жінка, що зустрічається одночасно з двома чоловіками, має ефективно використовувати свої вміння, щоби будувати відносини одразу з двома сторонами».

Президент Кучма був щойно призначений Президентом України в липні попереднього року. Тоді, я гадаю, він займав нейтральну позицію між Росією та ЄС, але після його переобрання на новий строк у мене склалося враження, що пан Кучма поступово зайняв проросійську позицію. Дивлячись на такі кроки Президента Кучми, здається, що напівжарт пана Янагісави несподівано точно передає суть ситуації.

Щодо наступного Президента, пана Ющенка, до мене дійшли розмови, що

Україна і я: 23 роки Парламентської асоціації дружби «Японія—Україна»

його отруїли під час президентських виборів, пошкодивши гарне обличчя чоловіка. Я зустрівся з ним якраз після цього, але зовсім не звернув уваги на ушкодження й подумав, що він доволі вродливий чоловік.

Кажуть, що Президент Ющенко займається бджільництвом. Я ніколи не чув, щоби хтось у Японії мав таке хобі, тому дуже здивувався. Здається, в Україні досить часто світські люди захоплюються бджільництвом.

Мало відомо, що Президент Ющенко, прилетівши до Японії, прямо з аеропорту вирушив до навчального закладу «Тамагава гакуен». Насправді, «Тамагава гакуен» — це альма-матер мого батька, і з цієї причини я зараз там є радником. Заклад «Тамагава гакуен» надзвичайно рідний мені, і коли я почув, що Президент попрямував з аеропорту відразу до нього, я здивувався, чому саме так. Але дізнавшись, що Президент захоплюється бджільництвом, усе стало зрозуміло. Адже Тамагавський університет є лідером у вивченні бджіл не тільки в Японії, але й у всьому світі.

Потім відвідала Японію Прем'єр-міністр Юлія Тимошенко. Ми зустрілись о 7:30 ранку за сніданком у готелі. Вона мала дійсно гарний вигляд, наче актриса, з ідеально укладеною косою. Крім того, я був захоплений, що вона встигла зробити такий макіяж о тій ранній годині.

У 2016 році, уже ставши головою асоціації, я зустрівся з Президентом Порошенком. Я високо оцінюю нинішні зусилля Президента Порошенка й побачив у ньому надійну людину, як і передбачав. Було чітко зрозуміло, що він докладає великих зусиль для боротьби з корупцією та проведення реформ. Дивлячись на кар'єру Президента Порошенка й зароблені статки в шоколадному бізнесі, я подумав, що він має бути й досвідченим бізнесменом. Проте під час його візиту до Японії шойно були опубліковані «панамські документи». Дуже шкода, що журналісти питали Президента тільки про них.

Й.О.: Дуже дякую. Дещо дивовижно, що мед пов'язав пана Морі і Президента Ющенка. Я гадаю, декому з вас відомо, що мед — це важлива експортна продукція українського сільського господарства. До речі, мед на обідньому столі нашої родини виготовлений в Україні, його вже можна придбати і в Японії.

Трохи змінюючи тему, я хотів би дещо розказати про Парламентську асоціацію дружби «Японія—Україна». Голова пан Морі має ступінь доктора технічних наук, заступник голови, член Палати представників Японії Кійохіко Тояма здобув ступінь доктора іренології у Великобританії, а голова секретаріату, член Палати представників Японії пан Моріяма є доктором юриспруденції та комерційних наук. На мою думку, мабуть, це найбільш високоосвічена парламентська асоціація в Японії. Я чув, що пан Морі, який колись працював у концерні «Кавасакі» й має досвід роботи інженером, ступінь доктора технічних наук, уже двічі відвідав Чорнобильську АЕС. Японія та Україна отримали спільний досвід у Фукусімі та Чорнобилі, і я хотів би почути ваші враження від візиту.

Е.М.: Я двічі був в Україні, у 2013 та 2015 роках, і шоразу їздив до Чорнобиля. Аварія на Фукусімській АЕС наштовхнула мене, колишнього інженера в галузі ядерної енергетики, на багато роздумів. Однак, на мою думку, немає сумніву, що людство не може існувати без використання ядерної енергії. Хоча я неодноразово був у Фукусімі, побачивши Чорнобиль на власні очі, я зрозумів, що ситуація надзвичайно відрізняється від Фукусіми.

У випадку з Фукусімою вітер дув із суші на море — і радіація пішла на Тихий океан. Тому, на щастя, кількість радіації, що потрапила на землю, була несподівано доволі малою, як для такої аварії. Немає лиха без добра. В Україні ж майже вся радіація потрапила на землю, через що рівень радіації в навколишньому середовищі все ще залишається високим і його дуже важко нормалізувати.

Україна і я: 23 роки Парламентської асоціації дружби «Японія—Україна»

Крім того, термін служби саркофагу, що закриває реактор, становить орієнтовно 100 років. Що робити після цього, я гадаю, стане доволі довготривалим завданням. На мій погляд, Японії та Україні судилося співпрацювати і в цьому плані.

Серед високопосадовців, з якими я зустрівся під час першого візиту, мені особливо запам'яталася пані Миколайчук, голова Державного комітету ядерного регулювання України. Пані Миколайчук розповіла мені, що передбачала, що колись станеться аварія на атомній електростанції, як у Фукусімі, але ніколи не могла подумати, що аварія відбудеться саме в Японії. Звичайно, ми, залучені в ядерну енергетику спеціалісти, пишалися найвищим рівнем якості й безпеки японських атомних електростанцій, тому були переконані, що на японській атомній електростанції не може статися серйозна аварія. Ми добре визнали цю небезпеку і зрозуміли, що потрібно докласти зусиль для мінімізації таких ризиків.

Крім того, коли трапилася аварія в Чорнобилі, Україна перебувала в складі Радянського Союзу. Той факт, що серйозні аварії в Три-Майл-Айленді, Чорнобилі, Фукусімі дивним чином трапилися в країнах із розвинутою ядерною енергетикою (Америці, Радянському Союзу і Японії), наштовхує на роздуми. Я вважаю, що необхідно зібрати цю інформацію в одному документі, вжити всіх необхідних заходів і будувати майбутнє ядерної енергетики з найбільшою увагою на безпеці. І в цьому питанні також я хотів би підтримувати відносини з Україною.

Й. О.: Дуже дякую. Я знову зміню тему. Гадаю, ви познайомилися з багатьма українцями, а не тільки з високопосадовцями, які зазначені в списку зустрічей. Чи могли б ви, будь ласка, розказати про знайомства, які найбільше запам'яталися?

Е.М.: Я надзвичайно поважаю й довіряю колишньому послу Миколі Кулінічу. Хоча почуття поваги виникло ще з першої зустрічі, воно зміцніло під час Великого східнояпонського землетрусу 11 березня 2011 року. Посол Кулініч поїхав в Україну незадовго до землетрусу, але в день катастрофи одразу повернувся до Японії. Відтоді посол перебував на своєму робочому місці, коли продовжувалися поштовхи, і не залишав Токіо, у якому зростало занепокоєння щодо радіації. Я чув, що багато послів різних країн поїхали в Кансай, на Кюсю або навіть до своєї країни. Тому позиція посла Кулініча яскраво показала мені, що він справжній друг Японії.

Й.О.: Пізніше посол Кулініч став директором Української дипломатичної академії в Києві, а зараз працює послом України в Австралії.

Отже, наступне запитання. Я гадаю, основною діяльністю голови асоціації є дипломатичні відносини з депутатами. На мою думку, дипломатія є основою зовнішніх зв'язків країни. На вашу думку, який вплив відіграє спілкування парламентарів на зовнішню політику Японії?

Е.М.: Наприклад, депутат Верховної Ради Костянтин Жеваго має офіс у Японії й часто відвідує його. Він також займається бізнесом, і ми підтримуємо дружні взаємини як парламентарі. На відміну від офіційного міжурядового спілкування, у неформальних умовах можна почути різні розповіді. Я гадаю, що дружнє спілкування між членами парламентів має надзвичайно велике значення, оскільки можна охопити різноманітні питання. Насправді, я вважаю, що було б доцільно частіше відвідувати Україну і знайомитися з різними людьми, але під час роботи японського парламенту парламентарі не можуть поїхати з країни. Наприклад, сесія триває до 20 липня, навіть якщо я поїду в Україну в серпні після закриття сесії, то там уже всі будуть у відпустці. Ось чому важко

Україна і я: 23 роки Парламентської асоціації дружби «Японія—Україна»

знайти відповідний час і не вдається частіше приїжджати. Однак, я гадаю, що надзвичайно важливо поглиблювати неформальні відносини, а не тільки офіційні.

Й.О.: Дуже дякую. Отже, з 1995 року ви зустрілися з більшістю Президентів України, а також із різними міністрами, депутатами Верховної Ради, які приїжджали до Японії. За цей час чи помітили ви якісь зміни: наприклад, за часів президентства Кучми було більше одного плану політиків, а зараз вони трохи змінилися тощо?

Е.М.: По-перше, коли розпався Радянський Союз, здавалося, що Україна ростиме й розвиватиметься найшвидше серед країн, що здобули незалежність, чи не так? Україна має велику площу, багата на родючі сільськогосподарські землі. Крім того, також володіє сильною промисловістю й технічною базою. Проте сучасна реальність показує, що поки передбачення не справджуються. Я вважаю, що головна причина полягає в політичній нестабільності. Інша причина і слабка сторона — відсутність власних енергетичних ресурсів у країні. Через це, мабуть, Україна була залежною від Росії й не могла піти своїм шляхом. Але після російського військового вторгнення у 2014 році я бачу, що вся країна зайняла антиросійську і проєвропейську позицію. Однак, я вважаю, що найважливіше — це стабільна політична ситуація, але вона, схоже, розхитується, як маятник.

Зараз мене надзвичайно турбують деякі речі. На мою думку, найпріоритетніше й найважливіше завдання для сучасної України — це боротьба з корупцією та проведення реформ, які підтримує Президент Порошенко. Але коли починають їх втілювати в життя, населення не підтримує зміни — і маятник навпаки знову розхитується. Мене це дуже засмучує, бо стабілізація політичної ситуації

в Україні позитивно вплине на майбутнє країни.

Случач: Дозвольте, будь ласка, запитати. Чому політична ситуація не стабілізується? (Скорочено).

Е.М.: Країна має й сильну промисловість, і технології, і сільськогосподарські землі. Зібрані всі умови, чи не так?

Й.О.: Я теж маю аналогічне запитання щодо політичної стабільності. Я поставив його співробітнику одного українського міністерства під час відрядження до України у квітні. Відповідь була досить цікава: «Звичайно, політична ситуація нестабільна, але чи це не тому, що ми маємо демократію?» Я подумав, що це досить дивна відповідь. Можливо, справді, політична нестабільність — це ознака того, що різні люди мають різні погляди, є різноманітність. Принаймні це краще, ніж у Росії, де цього немає, за його словами. Я гадаю, звичайно, важко вести бізнес у нестабільному середовищі, але відповідь цього співробітника також має право на існування.

Е.М.: Зрештою, у країні немає власних енергетичних ресурсів, через що Росія міцно тримає її за шию. Іншими словами, здається, що Росія має сильніший вплив на Україну, ніж на інші країни Східної Європи, що й розкитує ситуацію. Звичайно, можуть бути проблеми й у самій Україні, але я вважаю, зрештою, є й такі зовнішні чинники. Останнім часом нарешті зросло постачання енергетичних ресурсів із Західної Європи. У цьому сенсі Україна поступово стає менше залежною від Росії. Але з окупацією Криму країна дійсно відчуває безпосередній тиск Росії, чи не так? Цікаво, чи не тому дестабілізується політична ситуація? Країна розривається між двома сторонами. Проте зараз вона

Україна і я: 23 роки Парламентської асоціації дружби «Японія—Україна»
здається доволі об'єднаною для протистояння Росії.

Й.О.: Тоді я хотів би перейти до запитань від слухачів. Якщо хтось бажає поставити запитання, дуже прошу. Спочатку, будь ласка, назвіть ваше місце роботи та ім'я.

Богдан Павлій: Моє прізвище Павлій, я доцент Тоямського міжнародного університету. Десять років тому я жив у місті Хамамацу й під час спілкування зі співробітником компанії «Ямаха» дізнався, що в цій компанії розглядали Україну, наче околицю Росії або приєднану до Росії країну. Як українець, я сказав, що Україна ж набагато ближче до Європи. Однак мені відповіли, що коли ведеш бізнес за кордоном, треба входити з якогось каналу, тому легше це зробити, приєднавши Україну до Росії. Я гадаю, можливо, не тільки «Ямаха», але й більшість японських компаній і промисловостей розділяють цей погляд, метод роботи, але мені цікаво, яка ситуація тепер. Росія та Україна більше ж не можуть залишатися в одній групі? А можливо, ще не змінили свої погляди? Пане Морі, як ви гадаєте?

Й.О.: Ви запитуєте, як вважають японські компанії? Чи пан Морі?

Б.П.: Звичайно, пан Морі. Японському суспільству, політикам чи бізнесменам, наприклад, досі важко продавати товари напряму в Україну чи напряму реалізовувати проекти? Після 2014 року більше ж можна не перейматися про Росію? Такий зміст мого запитання.

Е.М.: Наприклад, зараз Німеччина є успішною країною в Центральній Європі. Яюсь можна зрозуміти, коли сусідні країни називають «околицями Німеч-

чини». З іншого боку, в Україні зараз, мабуть, загалом дійшли консунсенсусу, що країна піде іншим шляхом від Росії. Якщо це так, я гадаю, що світові залишається тільки визнати цей факт. На мою думку, в Україні дуже великий потенціал. Адже країна має й сильну промисловість, і науково-технічну базу. Наприклад, кібербезпека знаходиться на високому світовому рівні. Є багато можливостей, не кажучи вже про найбільш родючі землі у світі. Якщо політична ситуація стабілізується, то, використавши такі сильні сторони, я вважаю, можна наздогнати й обігнати Польщу й Німеччину. Однак, мені здається, що виснажена внутрішніми суперечками країна ніяк не може зрушитися вперед.

Й.О.: Дуже дякую. Хтось ще має запитання? Будь ласка.

Шінкічі Фуджіморі: Моє прізвище Фуджіморі, я заступник голови Асоціації українців Японії. Моє запитання трохи пов'язане з попереднім. Напевно, пан Морі також зустрічався з російськими депутатами й політиками. Чи помічали ви відмінності між українськими й російськими депутатами й політиками, наприклад, під час спільного обіду, коли українці куштували якусь страву на відміну від росіян? Якщо помічали, чи могли б, будь ласка, розказати?

Е.М.: Справа в тому, що я маю особисті дружні взаємини тільки з українськими політиками.

Й.О.: Чи бачили ви спільні риси в українських політиків?

Е.М.: Кожна людина унікальна. Наприклад, я неодноразово зустрічався з головою депутатської групи з міжпарламентських зв'язків із Японією Леонідом Ємцем і вважаю, що він має дуже серйозні погляди й гарні перспективи. Також

Україна і я: 23 роки Парламентської асоціації дружби «Японія—Україна»

було цікаво спілкуватися з Арсенієм Яценюком. Я відвідав Україну відразу після російського військового втручання й зустрівся з паном Яценюком, коли він був Прем'єр-міністром. Він дійсно щира людина і справив на мене гарне враження. Саме під час нашого візиту до України проходило засідання Генеральної Асамблеї ООН. Тоді пана Яценюка серйозно обурило, що представники всіх країн аплодували промові Путіна. Хотів би додати, що сучасні українські парламентарі дуже молодого віку, чи не так? Я вважаю, що все-таки можна обирати представників різних поколінь, а не тільки молодого.

Й.О.: Дуже дякую. Як щодо інших запитань? Я гадаю, що наступне запитання вже буде останнім. Прошу.

Віолетта Удовік (другий секретар Посольства України в Японії): Пане Морі, дуже дякую за цікаву розповідь. Я маю запитання. Сьогодні ми говорили про японських політиків, що підтримують зв'язки з Україною. Насправді, останнім часом я помітила, що звичайні японці мало знають про Україну. Раніше часто вважали Україну частиною Росії, але й у наш час ще необхідно пояснювати, що це зовсім інша країна. Тому я як співробітник посольства організую і планую різні заходи культурного обміну й інформаційні зустрічі. Чи могли б ви розказати, що треба зробити, щоби знайти прихильників України серед звичайних японців? Дуже дякую.

Е.М.: Як знайти шанувальників України серед японців? Я гадаю, що здебільшого японці не дуже знайомі з Україною, а якби дізналися більше, то вона б їм сподобалася. Я не можу багато говорити про інші країни, але японці не мають приязних почуттів до Росії. Україна ж зовсім не має негативного образу серед японців. Щоразу, коли я зустрічаюся з українцями, я розповідаю про три

спільні риси Японії й України. По-перше, ми зіткнулися із серйозними ядерними катастрофами. По-друге, ми не маємо внутрішніх ресурсів енергії. По-третє, межуємо з такою великою й обтяжливою країною, як Росія, чи не так? Якби не Росія, Україна та Японія відразу б стали сусідніми країнами. Останнім часом, можливо, дещо послабився бренд сумоїста Тайхо Кокі. Давайте разом подумаємо, як ми можемо привернути більше уваги японців до України.

Й.О.: Дуже дякую. Це буде домашнім завданням для пана Морі від пані Віолетти (сміється). Дуже дякую. Поступово час добігає кінця. Гадаю, що ця розмова могла б і далі тривати. Сьогодні ми прослухали спеціальну лекцію на тему «Україна і я: 23 роки Парламентської асоціації дружби «Японія—Україна». 2020 рік, який буде через 2 роки, стане роком Олімпійських ігор у Токіо, а також—25-ю річницею Парламентської асоціації дружби «Японія—Україна». І нещодавно я дізнався, що цього ж року пан Морі святкуватиме 30-річчя роботи в парламенті. Бажаю вам подальших успіхів. Надзвичайно дякую за вашу лекцію сьогодні.

(Кінець).

*Текст лекції з 39-го засідання Асоціації українців Японії (японський підрозділ Міжнародної асоціації українців) від 23 червня 2018 року (місце проведення: центр «Васеда хошіен»).

Історія Парламентської асоціації дружби «Японія—Україна»

Історія призначення голів асоціації

Березень 1995 р. Заснування Парламентської асоціації дружби «Японія—Україна»

Йошіро Хаяші призначений першим головою

Листопад 2003 р. Хакуо Янагісава призначений другим головою

Серпень 2011 р. Ейсукє Морі призначений третім головою

Історія зустрічей із високопосадовцями (за участі члена парламенту Ейсукє Морі)

Березень 1995 р. Президент Леонід Кучма

Травень 1997 р. Міністр закордонних справ Геннадій Удовенко

Жовтень 1997 р. Голова Національного агентства України з реконструкції та розвитку Роман Шпек

Березень 1998 р. Президент Генеральної Асамблеї ООН, міністр закордонних справ Геннадій Удовенко

Червень 2000 р. Міністр закордонних справ Борис Тарасюк (участь у церемонії поховання колишнього прем'єр-міністра Кейдзо Обучі)

Жовтень 2001 р. Дружина президента Леоніда Кучми, віце-прем'єр-міністр Володимир Семиноженко

Листопад 2001 р. Віце-спікер Верховної Ради Степан Гавриш із делегацією

Травень 2003 р. Голова Верховної Ради Володимир Литвин

Лютий 2004 р. Перший заступник міністра закордонних справ Володимир Єльченко

Червень 2004 р. Міністр закордонних справ Костянтин Грищенко

- Березень 2005 р. Віце-прем'єр-міністр Микола Томенко (участь у Всесвітній виставці «Експо 2005» у м. Айчі)
- Липень 2005 р. Президент Віктор Ющенко (у супроводі міністра закордонних справ Бориса Тарасюка, міністра економіки Сергія Терьохіна, міністра транспорту і зв'язку Євгена Червоненка)
- Березень 2008 р. Міністр закордонних справ Володимир Огризко
- Березень 2009 р. Прем'єр-міністр України Юлія Тимошенко, віце-прем'єр міністр Григорій Немиря, міністр економіки Богдан Данилишин, міністр палива та енергетики Юрій Продан, міністр промислової політики Володимир Новицький, міністр регіонального розвитку та будівництва Василь Куйбіда, міністр із питань ЖКГ Олексій Кучеренко, міністр вугільної промисловості Віктор Полтавець
- Січень 2011 р. Президент України Віктор Янукович у супроводі міністра закордонних справ Костянтина Грищенка, міністра культури Михайла Кулиняка (член парламенту Ейсукє Морі відсутній на зустрічі)
- Березень 2012 р. Голова Верховної Ради України Володимир Литвин
- Жовтень 2012 р. Голова Національного банку України Сергій Арбузов
- Серпень 2013 р. Візит до України. Огляд Чорнобиля, зустрічі з головою Державного комітету ядерного регулювання Оленою Миколайчук, віце-прем'єр-міністром Олександром Вілкулом та багатьма посадовцями
- Жовтень 2013 р. Обід із заступником голови Державного агентства України

- Україна і я: 23 роки Парламентської асоціації дружби «Японія—Україна»
з управління зоною відчуження Миколою Проскурою
- Листопад 2013 р. Візит колишнього головного інженера Чорнобильської АЕС Миколи Штейнберга
- Квітень 2014 р. Урочистий прийом співголови (голови депутатської групи з міжпарламентських зв'язків із Японією) Костянтина Жевага
- Березень 2015 р. Міністр закордонних справ Павло Клімкін
- Вер.-Жов. 2015 р. Візит до України. Прем'єр-міністр Арсеній Яценюк, Голова Верховної Ради Володимир Гройсман
- Лютий 2016 р. Голова Комітету Верховної Ради України в закордонних справах Ганна Гопко
- Квітень 2016 р. Президент Петро Порошенко, віце-прем'єр-міністр Геннадій Зубко, міністр закордонних справ Павло Клімкін, міністр енергетики та вугільної промисловості Володимир Демчишин, депутат Верховної Ради Юрій Луценко (пізніше — Генеральний прокурор), депутат Верховної Ради Тарас Кутовий (пізніше — міністр аграрної політики та продовольства), заступник міністра економічного розвитку і торгівлі Наталія Микольська та інші
- Вересень 2016 р. Київський міський голова Віталій Кличко
- Вересень 2016 р. Заступник голови Адміністрації Президента Дмитро Шимків
- Березень 2017 р. Голова Верховної Ради України Андрій Парубій і депутат Верховної Ради Леонід Ємець

Червень 2017 р.

Голова депутатської групи з міжпарламентських зв'язків із
Японією Леонід Ємець